

文芸投書雑誌『文庫』『新声』にみられる  
「地方文壇」の青年たちの地方意識と「中央文壇」へのまなざし  
— 小木曾旭晃と入澤涼月の事例を中心に—  
Provincial consciousness of young people of “provincial literary  
circles” and a look to “the central literary circle”  
described in literary publication magazine “Bunko” and “Shinsei”  
— Focusing on the case of Kyokko Ogiso and Ryogetsu Irisawa—

学籍番号: 201721699

氏名: 宮本 温子

Miyamoto Atsuko

本研究は、文芸投書雑誌『文庫』（明治二十八年～明治四十三年）『新声』（明治二十九年～明治四十三年）における地方読者の言論活動に着目する。先行研究では、両誌読者が誌面を介して「文学青年の勢力圏」を形成し、彼らの「誌友交際」のネットワークが全国的に広がっていたことが指摘されてきた。本稿では、両誌誌面にみられる地方青年の意識や、彼らが形成した「地方文壇」および各地の地方雑誌の勃興の密接な関連を明らかにすることを目的とする。

第一章では、地方青年と文芸投書雑誌の関係性を、地方の投書家として活躍していた室生犀星『性に目覚める頃』の記述、および河野紫雲の二名の事例から考察した。そのなかで、『文庫』『新声』が地方青年にとって「中央文壇」にアクセスする貴重な存在であり、それらへ投書するという行為が、彼らの文学への野心を掻き立て、同時に、自らの郷里における名誉を意識させ、同じような境遇を共有する他の投書青年との交流の契機となっていたことがわかった。

第二章では『文庫』『新声』および地方雑誌の『文壇』（明治二十九年～三十四年？）を対象に地方の読者に関する誌面分析を行った。『文庫』『新声』は地方の読者への同情的な態度や「中央」意識による啓蒙を巧みに織り交ぜ、全国各地に散居する読者に一体感を与えた。地方の読者はしばしば自らの郷里への愛着を表出させつつも、中央誌である『文庫』『新声』読者としての視点から地方を語った。その一方で、『文壇』は地方青年主体の空間を築き、互いに地方青年としての境遇や思想を共有しあう場として機能していた。

第三章では、「地方文壇」という言葉のもつ、地方の投書家らの「中央文壇」への対抗心による連帯感を高める機能と、地方における文学活動の拠点としての側面を考察した。その際、地方雑誌『山鳩』の主宰小木曾旭晃と『白虹』の主宰入澤涼月の事例をとりあげた。小木曾は地方雑誌刊行の傍ら、全国各地の地方青年および「地方雑誌」を団結させて「地方文壇」に「中央文壇」を凌駕する影響力を持たせようと目論んだ。その一方で、入澤は、郷里岡山の文壇の発展のために、『明星』の新詩社のコミュニティや、『文庫』派の文人たちなど、「中央文壇」とのつながりを戦略的に利用していた。こうした立場の違いから、二人は互いの雑誌上では敵対し続けたが、『文庫』『新声』誌上においては「地方文壇」に貢献する雑誌として互いの雑誌に言及し合い、一枚岩の「地方文壇」として連帯しようとする意識が見受けられた。

これらを通して、中央誌である『文庫』『新声』等の文芸投書雑誌が、「誌友交際」を介して全国各地の読者を結びつけると同時に、地方青年の団結をうながし、そして、各地の文学青年らは多様な志向をもちながらもひとつの共同体として「地方文壇」を形成し「中央文壇」への対抗意識を共有したという一連の流れが示唆された。

研究指導教員: 後藤 嘉宏  
副研究指導教員: 綿抜 豊昭